子ども医療センターに潤いをもたらしてくれるボランティアの方々

自治医科大学とちぎ子ども医療センター
ボランティアコーディネーター　鈴木　ふじえ

自治医科大学とちぎ子ども医療センター（以下「センター」）は平成18年に開設しましたが、それと同時にボランティアの導入も行ってきました。そして、来年9月にはボランティア活動9年が経過します。一般的に、ボランティア活動は、初めの勢いはよいけれど徐々に志気が低下し、活動者が減少する傾向に陥りやすいのですが、幸いなことに、当センターは毎年100名を超える登録があり、このうち7割の方が毎月定期的に活動してくださります。また、活動歴5年以上の方が全体の半数を超えており、本当にありがたく思っています。

○センターがボランティアを導入した目的

センターは高次小児医療の施設で、難治性疾患や重症疾患に日々向き合う医療となります。そのため、子どもたちとご家族が、どのような状況であっても明日への希望を抱き続けられるようなセンターでありたいと願いました。

重い疾患を告げられた子どもたちとご家族は、「どうして自分が…この先どうなるの…」と怒りや不安が増していきます。それらの思いを軽減するには、病院の職員だけでは限界があります。そこにボランティアの存在が必要となります。家族でも、医療従事者でもないボランティアの方の「共感」や「寄り添い」があることで、怒りや不安が少し吸収されます。また、地域の生活者としての視点を持ち込んでいただくことで、病院という非日常の中に日常性を取り戻すことができます。結果的には、医療の質の向上にも繋がっています。

○ボランティアコーディネーターの仕事

センター内にはボランティア室があり、そこにはボランティアコーディネーターがいます。近頃では、病院にボランティアコーディネーターがいることが多くなっていますが、当センターのように開設時から専任のコーディネーターを配置したのは全国でも例が少なく、それだけボランティアの導入に積極的だったということです。

コーディネーターの仕事は、一言でいうなら「つなぐ」ことです。病院の中の多様なニーズを受け、ボランティアを募集し、円滑な活動ができるようにします。また、ボランティアの力を充分に発揮できるように、ボランティアならではの気づきを活かせるように調整します。更には、活動における不安や戸惑い等のサポートもしています。ボランティアの方と一緒により良い医療環境を作れるように日々活動しています。

○ボランティア活動の内容

①外来活動：案内、診察待ちの子どもの見守りなど

②病棟活動：乳幼児を対象にした保育活動の援助、学齢児を対象にした学習・余暇活動の援助、病棟行事参加

③作業活動：装飾…季節の装飾を製作。手芸…肌着、バギーカバーなどの製作。園芸…センター周辺の草花のメンテナンス。その他…水槽清掃など。

以上が主な活動で、各活動は平日行っています。（土・日・祝祭日は活動をしていません。）

それ以外に、花咲j・i・iの活動（毎月第3または第4日曜日の午前中に行われる園芸活動）があります。

○ボランティア活動者からの声

・子どもから元気をもらえた

・子どもや家族から教えてもらうことが多く、勉強になっている。

・お金が介在しないから純粋な気持ちで活動することができる。

・『ありがとう』の一言で、ボランティアに来て良かったと思える。

・自分が誰かの役に立っていると思えるのは嬉しい。

・仲間ができて楽しい。

・ノルマに縛られないのでのびのびできる。

○職員側からの声

・職員ができない細やかでゆったりした対応をしてもらえる。

・発想が豊かで感心する。職員に真似できない。

・子ども達や家族に柔軟に対応してもらえる。

○最後に

毎年4月に行うボランティア説明会において、ボランティア活動のポイントは『共感する』『寄り添う』という話をさせていただきますが、この言葉は〝言うが易し行うは難し〟です。しかしながら、センターのボランティアの方々は地道な活動を重ねながら「共感」し「寄り添って」くださっています。

この場をお借りして、ボランティア活動にご参加いただいている下野市民の方々には心から感謝申しあげるとともに、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。